

第 103 回日本精神神経学会総会

シンポジウム

新医師精神科臨床研修のアウトカム評価

コーディネーター 関 健, 保坂 隆

新医師卒後研修制度が開始されてから 4 年目を迎えた。この間、精神科を含めて地域医療の実情は大きく変化し、広がる地域格差や医師偏在など様々な問題・課題も噴出している。そこで現時点において、本制度下における精神科研修を振り返り、次期の制度見直しに備えることには大きな意義があると思われる。

新医師臨床研修制度において精神科が必修化され、当該研修を修了した最初の医師達が後期研修に入っている。精神科七者懇談会に所属する団体では、これらの医師達及び研修病院を対象とした様々なアンケート調査を行い、今後の精神科研修のあり方を検討しようと試みた。本シンポジウムにおいては、各アンケート結果を基に精神科臨床研修のアウトカム評価を行い、研修の見直しに資する提言を行いたい。

初期研修を終了して現在精神科以外の科の後期研修 1 年目の医師たちを対象に、精神科研修の効果を問うアンケート調査を行った。対象は、日本精神科病院協会会員病院で臨床研修指定病院となっている病院、及び、兵庫医科大学、神戸大学、信州大学、筑波大学の 4 大学病院である。調査の内容は、対象者自身が経験した研修システムと機関と研修期間、現在従事している診療科名、現在の科において経験した精神障害を有する患者さんの有無、精神科研修における成果を発揮する機会があったか否か、といった項目である。前者は水

木泰下関病院理事長が、後者は朝田隆筑波大学教授が結果発表した。

精神科卒後研修問題委員会は、平成 18 年に新医師卒後臨床研修制度を修了した第一期生に対し 6 つの行動目標と医療面接をどの診療科の研修で学ぶことができたか、アンケート調査を行い、802 名（厚生労働省発表の平成 16 年度初期研修医の 11 %）から回収した。ほとんどが 2 年目に 1 ヶ月（72.4 %）の研修を行っており、研修医の半数が精神科病院、2/3 が大学病院を含む総合病院での研修を経験していた。精神障害に対する偏見の除去や理解、認知症の社会機能診断、臨床精神薬理学、自殺予防、チーム医療・社会復帰活動・地域リハビリテーション、認知症の診断と主治医診断書の記入等、精神科研修の有用度・満足度は高かった。この発表は三井記念病院中嶋義文精神科部長が発表した。

国立病院機構肥前医療センターでは、7 つの管理型病院から平成 17、18 年度ともに 44 名の研修医を受け入れ、2 ヶ月間の精神科臨床研修を行っている。研修医には研修開始前と研修終了時にほぼ同じ内容で、無記名でアンケート調査を行っている。アンケートは、精神疾患患者に対する不安、偏見と精神疾患患者のノーマライゼーションについての理解、精神医学や精神科医療の科学性や重要性についての理解・評価、卒後臨床研修の中での精神科研修の必要性、精神科医師に対する評価、

研修医自身のメンタルヘルスの5つの領域に関するものである。精神科臨床研修については、改善すべき事柄についても研修医側から何点か指摘を受けているが、病院が掲げている研修の目標を研修医側も理解し、精神疾患患者、精神科医師と精神科医療を正當に評価する素地作りに一定の貢献はできているものと考えている。杠岳文副院長が発表した。

日本若手精神科医の会では、平成17年に研修医、若手精神科医を対象とした多施設アンケート調査を行った。本調査の目的は、精神科研修の実施状況を調査すること、研修医の精神科研修への意識を調査し研修前後で比較することであった。精神科研修が精神医療への偏見の軽減の一助となる可能性は大きい。指導医側の問題点としては、自身の時間不足や、研修医のモチベーション、研修医にどこまで責任をもたせるかという点を挙げ

るものが多かった。横浜市立大学の佐藤玲子医師が発表した。

討論の中では、精神科研修の所期の目的、すなわち①精神疾患の診断能力の向上、②精神科・精神疾患患者に対する偏見の除去などでは、成果が上がったと評価されたが、③精神科医を増やす、④コミュニケーション能力の向上（患者-医師関係の構築）などでは、十分な成果は得られていないとの意見が多かった。フロアからは、指導医を兼ねる一人医長の総合病院精神科における精神科研修受け入れ時の疲弊について、当事者からの切実な訴えがあった。また、後期研修（精神科専門医研修）について、都会（東京・大阪）の民間病院で数名の研修医が研修をしているのに反し、地方の国立大学に後期研修医がいない現状も浮き彫りにされた。